

ハイデガー・フォーラム第16回大会

応募要旨3

(統一テーマ：文学)

「穴」の存在論を再検討するために
——ハイデガーとティム・オブライエンの視点から——

「穴」は存在する何ものであるのか、それとも一種の「不在」なのだろうか。主に英米圏において話題となっていた「穴」をめぐる問題は、現代的「形而上学」の一例としてしばしば言及されている。

穴が開いたドーナツがあるとしよう。ドーナツを持ち運ぶことは可能である。その場合、ドーナツに空いた穴も同時に「移動」すると言えるのだろうか？そしてドーナツをぐるぐると回転させた場合、その穴は「回転」しているのだろうか？¹

このような問いを、ハイデガーが語ったような「形而上学」を関連させて良いのかどうかは明らかではない。だがハイデガーの思考から、現代的な問題を考える契機を読み取ることは可能であろう。例えば門脇は、ハイデガーにおける「事物的存在性」と「コンテクスト性」との関係に一種の不整合を見出していた。門脇によれば、一方で「事物的存在性は、主張を持った命題間の正当化の関係という、ある種のコンテクストと一体になって成立する」²のだが、他方でハイデガーは「事物的存在性を適所性の抹消と結びつけて考えている」³。門脇はこの不整合を検討することによって、ハイデガー的「存在論的ア・プリオリという発想」⁴を正当に評価しようとするのだが、この門脇の発想はおそらく「穴」の問題を思考する際にも役立つ可能性があるのではないかと。

門脇の読解は、「事物的存在性」が了解される際には「コンテクスト性」の成立と同時に「適所性の抹消」が付随するというものである。大抵の事物は「道具的存在」として「現存在」に対し現れるのだが、「穴」というのは「道具的」でもあるだろうし、また「事物的存在性」を持つものとしても出会われるだろう。柏端は「穴が回転するかどうかについて、われわれが前理論的な直観をろくにもっていない点」⁵に注意を促しているが、何かしらの「直観」をもとに「穴」の存在について見解を主張することは可能である。だがこの「直観」というのが曲者であって、人が「穴」

¹ 穴が「移動」するか、あるいは「回転」するかという点を明示的に論じた加地大介『穴と境界存在論的探求』（春秋社、2008年）に対し、柏端は別の観点から批評を加えている（柏端達也『現代形而上学入門』勁草書房、2017年）。

² 門脇俊介『理由と空間の現象学』創文社、2002年、169頁。

³ 門脇前掲書、172頁。

⁴ 門脇前掲書、176頁。

⁵ 柏端前掲書、66頁。

に対しどのような「直観」を持っているのか、この点を問題にしている論者は多くないのではないか。カサティとヴァルツィ、ルイスらの研究を論じたウェイクらの論文でも「直観的に」あるいは「反直観的」という語が使われているのだが⁶、「直観」がいかなる内実を持つのかについて検討されているわけではない。「直観」を暗黙の規準として「穴」を論じるのではなく、「コンテクスト性」および「適所性」という論点の方が「穴」の存在を論じるための適切な議論の場を提供できるのではないだろうか。

もう一点、「穴」に対する「直観」自体を論じる余地として、今回のフォーラムの統一テーマである「文学」を引き合いに出してみたい。今回取り上げたいのは、村上春樹が翻訳した、ティム・オブライエンによる『ニュークリア・エイジ』という小説である。この小説で主人公は全編を通じて「穴」を掘るのだが、それは単に核のシェルターとして身を護るというためだけとは思われない。「穴」はおそらく何かの役に立つものでもあるのだが、同時に「穴」はそのような有用性からは大きく逸脱してしまっているものとして扱われている。ハイデガーの用語で言えば、この小説での「穴」は「コンテクスト性」を持ちつつも「適所性」をほぼ失っているのではないだろうか。

本発表では現代形而上学が扱う「穴」の問題に対し、一方でハイデガーの「事物的存在性」や「適所性」の議論を突き合わせてみることを課題とする。紙幅に余裕があれば『存在と時間』だけでなく、1949年の「ブレーメン講演」での議論も視野に入れてみたい。他方、文学的領域において、オブライエンの『ニュークリア・エイジ』を扱い、「穴」という特異な存在者のあり方を扱う。これらの検討を通じて、「穴」の存在をどのように理解するのかという問題に対し一定の理解を示すことが可能になるはずである。

⁶ Andrew Wake, Joshua Spencer, Gregory Fowler, 'Holes as Regions of Spacetime', *The Monist*, Volume 90, Issue 3, 1 July 2007, Pages 372–378, 372.